

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370182

研究課題名(和文) 日本近代における 黒人 画像 人種表象の視覚文化史

研究課題名(英文) "Black" images in modern Japanese culture--The History of the visual culture of racial representations

研究代表者

向後 恵里子 (KOGO, Eriko)

明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：80454015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の近代を中心に、美術作品および複製メディアといった視覚文化における「黒人」の人種表象を実証的に調査・考察するものである。日本の「黒人」表象においては、現実の接触の少なさから、「膚の色」という視覚的な情報による身体の差異化が重視される。それはおうおうにして、誇張やステレオタイプと結びつく、虚構にしか存在しない「黒人」像を作る。各時期における「黒人」表象の様相は、日本近代において人々が肌の色の違いにこめた人種観・文明観・世界観の変容をものがたり、共有された他者へのまなざしを示す。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to empirically investigate the racial representations of the "black" images in visual culture, such as artworks and reproduction media, mainly in modern Japan. In Japan's "black" representations, emphasis is placed on the differentiation of the visual information of skin color because of little real contact in society. The idea creates images that exist only in fiction, which is associated with exaggeration and stereotypes. "Black" skins in each period are tinged with the transfiguration of the views of race, civilization, and the world, and reflect a shared gaze toward the "others."

研究分野：日本近代美術史 視覚文化論 表象文化論

キーワード：美術史 視覚文化論 表象文化論 身体 イメージ論 人種イメージ 黒人 芸術諸学

1. 研究開始当初の背景

(1) 虚構としての人種・民族概念と表象

人種や民族の概念は、生物学的な普遍性を装って提示されるが、実際には社会的またはイデオロギー的に構築されたものである。これはすでに多くの研究によって指摘されている。たとえば小坂井敏晶は『民族という虚構』(東大出版会、2002)のなかで、民族概念がいかに虚構と現実とを結び、また支えられているかを示した。

こうした人種や民族の観念を、確固たる現象として現実のなかへ作り出すはたらきを有するのが、言葉や視覚、さらには嗅覚なども含めた多岐にわたる表象である(竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店、2009)。

(2) 先行研究

植民地主義やオリエンタリズムといった概念を背景に、文化や芸術表現と社会の様々な関係を重視する視覚文化研究の広がりにおいて、人種の表象への関心は広く共有され、成果もまとめられている。

そうした研究において、分析の対象は美術作品(*The Image of the Black in Western Art* シリーズ, Harvard University Press, 2010-12、続刊)や、ポピュラーカルチャー(Jan Nederveen Pieterse, *White on Black: Images of Africa and Blacks in Western Popular Culture*, Yale University, 1992 など)、また写真作品など(James Ryan, *Picturing Empire: Photography and the Visualisation of the British Empire*, Reaktion Books, 1997)、多岐にわたっている。

こうした研究においては、人々のアイデンティティや他者へのまなざしの形成を問う鍵として人種表象の問題が多角的に取り上げられる。それは文化における政治性への問いを包含しながら、具体的な事例の考察を行うものが多い(萩原弘子『ブラック-人種と視線をめぐる闘争』毎日新聞社、2002)。

(3) 近代日本における〈黒人〉とその表象

構築され表象される人種の政治性という視点にたてば、そのイメージが生まれる場

は、アメリカにおける白人／黒人の状況のような現実社会で接する状況のみに限らない。

たとえば日本にあっては、共住の経験は少数であっても、〈黒人〉は非日常の遠い世界の出来事としては表象され続けていた。

実際に出会い、ふれあい、語ることの少ないがゆえに、それら〈黒人〉表象は、「肌の色」という視覚的な情報による身体の差異化が重視されるだろう。これは肌の色をより濃く、より黒く、ステレオタイプに落とし込まれつつ表現される人々は、本来は多様でひとくくりにはできない黒人種(ネグロイド)の人々とは異なる、虚構に住まう〈黒人〉であると仮定できる。

2. 研究の目的

(1) 〈黒人〉の表象

以上の背景から、本研究は、植民地主義やオリエンタリズムといった、文化や芸術表現と社会の様々な結びつきやその政治性を重視する研究の広がりを背景に、人種や民族という人間のカテゴリの表象について、近代日本における〈黒人〉を事例とした調査・考察を目的とする。

本研究では、「黒い肌」「色の濃い肌」で表される人種という視覚上の共通点を重視し、〈黒人〉を狭義の黒色人種(ネグロイド)のみを示すものではなく、その時々々の知識や観念の変化にもよって変容する他者としてとらえる。

(2) 研究の射程

このような虚構の住人としての〈黒人〉イメージは、近世から近代へ、時代の推移とともにその様相が変化していることが推測される。また、現実の照応関係の乏しさおよび、表象される側からの異議申し立ての機会の少なさゆえに、日本文化における〈黒人〉表象は、往々にして虚構が現実を牽引する局面も予想される。

したがって本研究の事例は、虚構であるがゆえに力をもつというイメージの政治性、その力学を探ることも目標とする。

3. 研究の方法

(1) 調査・考察の方針

先に触れたように、本研究の主眼とする

日本近代における〈黒人〉表象の研究は、オリエンタリズムやポストコロニアリズムに基づいた視覚文化研究や、人種・民族にかんする表象研究から構想されたものである。

欧米における黒人や、東アジアにおける被植民地支配を受けた人々などにくらべると、この〈黒人〉表象は基礎的資料の精査が必要な段階である。

したがって、本研究は次の三段階にそって進められた。まず、近代日本の〈黒人〉図像の概要を調査し、その変遷の様相を明らかにする。次に、それら〈黒人〉図像に描かれた主題、表現や描写、様式、モチーフ等を当時の文脈にしたがって分析する。さらに、そうした人種表象のはらむ社会的・文化的意義について、より広い考察を加えてゆく。

加えて、本研究では、こうした重層的な表象を分析しながら、虚構のイメージが現実にかかわっていったのか、またそれが今日にいたる人種に対する差別的なまなざしへどう結びついてゆくのかを批判的にとらえるようこころみた。

(2) 対象の範囲

本研究は先行研究を参考に、美術作品および写真や版画をふくむ複製メディアを調査の対象とする。とくに日本の近代は、短期間に様々な絵画技法や印刷技術が、より精細に、より大量にイメージを複製する方向へ展開し、また大衆的な出版文化が多く、イメージを作り伝えるメディアとなった時代である。

したがって、本研究はできるだけ既存のジャンルを横断し、また大衆的な複製メディアを重要視して調査を行った。また、そうしたメディアにおいて視覚イメージとともに配され、イメージの読み方を規定していくテキストについても同様に調査をすすめた。

(3) 時代と地域

本研究は明治時代～1945年の日本を調査と考察の中心的なフィールドとする。とはいえ、近代の変容とその複数の流れを把握し、長期的なパースペクティブを得、現代につながる問いを認識するために、近世

や現代における事例を適宜調査した。

同様に、対象の地域は日本であるが、様々な時代において日本の文化に響いたであろう、他の地域の事例についても調査を行った。とりわけ、ヨーロッパとアメリカにおける黒人表象の歴史―他者として〈黒人〉を描いてきた歴史の詳細と、その具体的な陥穽と克服のためのいとなみは、ひるがえって日本の事例を分析するために重要な役割を果たした。

4. 研究成果

(1) 〈黒人〉表象を駆動させるもの

研究目的において述べた通り、本研究は虚構イメージが現実を主導するような関係を、日本近代の〈黒人〉表象から考察するものである。

先に総括して述べれば、この虚構の駆動力としてはたらくのは、近代の日本という場に存在した様々な思想を背景とした文明観・人間観である。後述するように、日本における〈黒人〉の表象においては、東洋的世界観における異人、西洋的文明観における未開人・野蛮人といった複数の人種観が推移し、また西のかなたの異国に対するエキゾチズムとオリエンタリズムとがないまぜになって描かれている。

それらの図像は、現実社会のなかで隣り合う人々の間から生まれてくる表象とはおのずから異なっている。現実に対する認識をむしろ作りだすような視覚的特徴を、たとえば「黒い肌」といったわかりやすいステレオタイプとして有し、まったく他者のイメージを作り出している。

そうした他者のイメージは、ひるがえって、眺める主体の変容も物語る。たとえば図1のような雑誌表紙の図像は、その典型的なものであろう。本図は日露戦争に勝利した直後、1905年（明治38年）11月の発行である。描かれた人物は、真っ黒な肌にぎょろりとした眼、ぶあつい唇が強調され、それ以外の個性は捨象された黒人のステレオタイプを有している。このステレオタイプは、日本のみならず世界の広範囲に共有されたものであるが、日本において本格的に広まるのはこれ以降のことと考えられる。

図の人物は、たしかに黒人ステレオタイプとしての特徴を有しているが、しかし曖

図1 鹿子木孟郎「黒奴」
雑誌『平旦』第3号表紙(1905年)



味な点も多くある。彼の衣裳は、仏像の衣を想起させるような袈裟懸けにされた黄色い布地である。また緑色の布を頭部に巻いており、それはインドのシク教徒のターバンを思わせる。アール・ヌーボー調に図案化された椰子の木、手にもつ長い棒は、この人物がどこでなにをしているのかははっきりした情報は示さず、ただ漠然と南方的な舞台を作っている。

ただし、それらの背後には旭日が大きく配されている。発行された時期を考慮すれば、これは戦争の勝利・帝国の栄光のイメージと結びつく。日露戦争の勝利は自らが一等国であり、文明国たらんとする国家(日本)のセルフイメージに方向性を与えたが、その勝利と栄光を背景に(黒人)を表象する、この行為自体に自らの優位性の確認があるだろう。すなわち、他の西洋文化圏と同じように、自らも(黒人)をまなざすことのできるという身ぶりである。

(2) 近世からの(黒人)観：崑崙人と黒坊

とはいえ、日本近代の(黒人)表象は、徹頭徹尾そのような西洋文化にならった人種的優位性の誇示としてのみ機能していたわけではない。

東アジア文化圏において、『山海経』より端を発する世界の地誌には、黒い膚をもつ西戎の部族である崑崙人が登場する。手長足長や穿胸国の住人とともに描かれるこの(黒人)は、東アジア文化圏のなかの異人

表象のひとつである。平安時代の史書『日本後紀』には、崑崙人が漂着したという記載が見られ、現実の人々の呼称としても用いられていることがうかがえる。この時、おそらく漂着したのは東南アジアにルーツをもつ人々であっただろう。

幕末期において流行した異国見物を主題とした見世物にも崑崙人が登場し、その表象が人口に膾炙したものであったことが知られる(国芳画、錦絵「浅草奥山生人形」1855)。

また一方、(黒人)を蔑視し、野蛮な存在としてみなすまなざしも、16世紀には登場している。当時イエズス会宣教師たちは黒人の従者を連れて日本を訪れており、『日葡辞書』には「黒坊(くろんぼう)」という言葉が「野蛮人、または色の黒い人」の意として紹介されている。白人と黒人の主従の様子は多くの南蛮屏風や、江戸時代の長崎版画に観察することができる。かれらの肌の色は、漆黒というよりは灰色に近いものが多い。

1819(文政2)年には、中村芝翫が中村座『御名残押絵交張』において「崑崙坊」を演じた。五雲亭国貞の役者絵からは、それが黒塗りで演じられた様子がわかる。またこの「崑崙坊」は珊瑚一南方の物産とともに描かれ、その黒人と珊瑚の結びつきは『北斎漫画』第三編にも確認できるものである。

(3) 世界の把握と(黒人)の位置づけ

幕末期になると、開国の動きから、それまで以上に(黒人)の表象が増える。洋風画の絵師司馬江漢は天明年間に長崎を旅した『江漢西遊日記』において、黒人について「色黒く髪チリ／＼と雲珠(ウヅ)巻になり、総て目鼻も甚だ異り、夏は裸の上へけさの様なる物を着るなり」と描写し、「辞(コトバ)は天竺ことばにして蘭人にも不通。甚だキタナキ者なり」と述べている。

森嶋中良編『万国新話』(1789、寛政元年)には、真っ黒の肌と耳に輪を通す穴をもち、裸に近い衣裳で布を肩からかけてしゃがむ黒人の姿が登場している。その顔貌は、いくぶんか仏僧のようである。

また明治8年に出版された『通俗伊蘇普物語』には、「黒奴(くろんぼう)の話」が見られるが、この「黒奴」は主人に買われる

存在で、その色の黒さを怠慢として責められ、激しく洗われるが、その仕打ちのために死んでしまう。その結論は、「自然(てんねん)悪い性質は人間業ではなほりませぬ」。

〈黒人〉はキタナク、自分たちや西洋人と異なる風俗をもち、奴隷で、悪い性質をもつ。これらの〈黒人〉の表象は、地理や翻訳を通して世界の人種の知識を得、それを観察する態度に含まれている、西洋における蔑視のよりはっきりとした移入である。

(4) 「土人」の発見：植民地経営の身ぶり

さらに、近代の日本は、自らの周辺にも肌の色濃い人が暮らす領域を発見し、それら「土人」の主人としてふるまっていくようになる。この〈黒人〉たちは、東アジアから東南アジア、南太平洋で実際に出会い、植民地経営とオリエンタリズムとエキゾチシズムの受け皿、冒険と支配、征服の対象となる人々である。

明治7年の台湾出兵を扱った新聞錦絵『東京日々新聞』では、打ち倒され従えるべき「生蕃」や「土人」たちは、茶色の肌で描かれている。

その肌の濃さは、鈴木経勲、井上彦三郎の『南嶋巡航記』(1893)のような南方への視線の拡大とともに、南方の人々の特徴としてよりいっそうはっきりと描かれるようになった。

こうした人々は、往々にして日本の探検の舞台となり、その支配を喜び、感謝するものとして描かれる。

日露戦争の勝利後、朝鮮半島を併合した後に発行された児童書『日の丸王 世界探検お伽噺し』(目黒書店、1910)の吉丸一昌による「はしがき」は、「今や朝鮮は、我国の版図に加はり、六千余万の国民は、世界に雄飛すべき時なれば、世界探検お伽噺しを少国民に語つて、天下を小にするの志を養はしむるは、吾人文筆の徒の務なりと信ず」とはじまる。なかの挿図では、金太郎や熊を連れた子どもが茶色の肌をもちターバンをつけた半裸の男性にオーストラリアを案内してもらっている。

(5) 人種差別の固定化：愚かで野蛮な人々

忠実だが愚かな従僕としての〈黒人〉イメージは、より蔑視的にあらわれる時も見

られる。少年向けの冒険譚には、下僕としての「黒奴」、「忠僕」であるが「豚尾漢(チヤン/＼)の出来損ひ」として蔑み、それを当然とするような描写が登場している(三津木春影(一実)『日本青年亜非利加猛獣国探検』成功雑誌社、1908(明41)年、1-2頁)。

また野蛮で獰猛、文明人に危害を加える敵対的存在としての〈黒人〉像も、広く見受けられるようになる。たとえばフランシス・フォード監督の連続活劇『名金』(*The Broken Coin*, 1915、同年日本公開)をもとにした小説のクライマックスは、「黒闇々たる闇の夜に、火山の炎は天を焦して燃熾つて居る。／其の周囲に、甲部落の蛮人共が集つて、キチイの身を高く捧げ、神に犠牲を捧げるといふ(…)」(長瀬春風『探偵活劇名金 後編』博文館、1916年、225頁)と、野蛮な〈黒人〉にとらえられ窮地におちいる女性が描かれている。

白人女性へ乱暴する黒人男性のイメージは、のち1924年に日本公開される『国民の創生』(1915)とも共通する、当時のアメリカで支配的な黒人像、人種観と共通するものである。

吉野作造は1916年の著作『現代米国』において黒人種について「彼等は白人種の孰れに比しても劣等なるは勿論、世界各人種中最劣悪人種の一なることを忘るべからず」と断言している。こうした人種観が表象と言説において強固にはたらいっている証左である。

(6) 黒い肉体の美

こうした反文明的な他者として、暴力の欲望を満たす〈黒人〉たちは、ときにエキゾチックなエロスと豊穡のイメージとも結びついた。とくにそれは〈黒人〉女性の凶像に顕著である(ボクシングやアスリートは〈黒人〉男性と結びついた)。

たとえば1920年代から30年代のパリで圧倒的な人気をばくした黒人ダンサージョセフィン・ベーカーは、エロ・グロの魅力と結びつけられながら、「彼女は踊る。／彼女の黒い肉体は踊る。／四本の足をもつた黒い蛇のやうに踊る。／彼女の赤い唇——まるでトマトの熟し切つたやうな唇、その唇が暗の中の一点の朱のやうに浮動する。」

(尖端軟派文学研究会編『巴里・上海エロ大市場』〈尖端エロ叢書〉法令館、1930(昭和5)年、29-38頁)とうたわれる。

この描写は、黒い膚と分厚い唇をもつ(黒人)ステレオタイプも想起させる。この記号的に処理される(黒人)たちは、たとえばカルピス、スモカ歯磨きの広告に、その商品の白さと対比的にあしらわれ、またエキゾチックな趣きをそえている。「熱い唇に冷たいカルピス」と書かれたカルピスのコピーと、こちらを向いてストローで白い液体を飲む、帽子を被りタイを結んだ(黒人)像は、同時代のジャズ文化との連想も可能であろう。

また南洋の「土人」の女性たちは、たわわな果物とともに、絵葉書に、パンフレットに、絵画に、高貴な野蛮人の黒い膚のヌードとして登場する。これもまた、支配と欲望のまなざしの反映の一形態であろう。

(7) 肌の色：問いの不在

以上見てきたように、日本近代の(黒人)表象は、東洋における異人観と、西洋の人種観・文明観が融合し、変化してゆく過程をみせている。この人種観は、目に見える肌の色を、生物学的な優劣の根拠としてとらえるものとして推移した。その過程で日本人は、「色の濃い肌」をもつ(土人)を、自らの辺境に発見し、自らの支配の対象として描き出していった。また一方、(黒人)は強烈なエキゾティシズムの記号としても表象されているが、その折にも西洋における蔑視と欲望に見る主体である自らを重ね合わせる、複合的なまなざしを考察にいれる必要がある。

こうした描写において、「肌の色」の重視はしかし、おのれの「黄色い肌」にも目をむけさせることとなっただろうか。この次代を通して、黄禍論は重要な観点であった。しかし、こうした(黒人)表象に登場する、往々にして支配と冒険の主体となる(日本人)たちの肌の色は描写されない。自らに対する問いは不在のまま、ただ他者へのまなざしが描かれるのである。黄色はどこへ行ったのか。自らを外して他者を見ることで形成される、そのセルフイメージの問題は、今後の課題となるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 向後恵里子「日露戦争の美術—戦争画・従軍画家・美術国」『近代画説』第26号(明治美術学会)、2017年12月、94-111頁(査読有)。
- ② 向後恵里子「蛾の図像から蝶の図案へ—和田英作の三井呉服店絵葉書からみる明治時代後期百貨店の広告イメージ」『明星大学研究紀要 人文学部・日本文化学科』第25号、明星大学、2017年5月、116-104頁(査読無)。
- ③ 向後恵里子「目撃される英雄—近代の戦争における従軍者の語り、観戦者のまなざし」『軍記と語り物』第52号、24-35頁(査読無) 2016年3月。
- ④ 向後恵里子「露助の表象—日露戦争期における敵としてのロシア兵イメージをめぐって—」『明星大学研究紀要 人文学部・日本文化学科』第23号、明星大学、2015年3月、301-310頁。

[学会発表] (計1件)

- ① 向後恵里子「黒い膚の幻想——日本近代の(黒人)イメージをめぐって」(サントリー文化財団研究助成プロジェクト 第5回国際シンポジウム「東アジアにおける大衆的図像の視覚文化論」、同志社大学、2015年12月26日)

[図書] (共著、計2件)

- ① 向後恵里子「木口木版による(近代の戦争)の図解—日清戦争を中心に」『木口木版のメディア史 近代日本のヴィジュアルコミュニケーション』勉誠出版、240-259頁(査読無)2018年3月。
- ② 向後恵里子「英雄の古層—日露戦争における武士と兵士のアナロジー」『幕末・明治—移行期の思想と文化』勉誠出版、68-91頁(査読無)2016年5月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

向後 恵里子 (KOGO, Eriko)
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号： 80454015